



# 県一JAで 組合員の負託に応える (下)

ゲスト/平岡 武 (JA山口県 経営管理委員会会長)

## 第37回ゲスト

JA山口県 経営管理委員会会長  
**平岡 武**



ひらおか・たけし

1955年山口県生まれ。大学卒業後、1982年仁保農業協同組合に入組。2016年山口中央農業協同組合代表理事常務、2019年山口県農業協同組合常務理事を歴任。2023年度に経営管理委員会制度に移行し、経営管理委員会会長に就任。認定農業者であり、農事組合法人理事も務める。

## ●インタビューとまとめ

三重大学名誉教授  
京都大学学術情報メディアセンター研究員  
**石田正昭**



いしだ・まさあき

1948年生まれ。東京大学大学院農学系研究科博士課程満期退学。農学博士。専門は地域農業論、協同組合論。元・日本協同組合学会会長。三重大学、龍谷大学の教授を経て、現職。近刊書に『JA女性組織の未来 躍動へのグランドデザイン』『いのち・地域を未来につなぐ これからの協同組合間連携』(ともに編著、家の光協会刊)。

\* 前回の記事は [コチラ](#) から

## 県一JAで組合員の負託に応える

J A山口県は「つなぐ」をキーワードに教育文化活動基本方針「元気な地域づくり活動」を策定し、「家の光三誌」「日本農業新聞」などを活用して「信頼される職員」の育成に取り組んでいる。職員のあいだで「教育文化活動は土づくり」という理解も広がり、記事活用グループも多数誕生している。その経緯を平岡武会長に語ってもらった。

### ■ 自己改革業績評価目標を上回る実績を達成

**石田：**『第2次中期経営3カ年事業計画(自己改革)業績評価目標』の、令和5年度の新規組合員数の目標は2,000人でしたが、実績は8,725人でした。実績が目標の4倍以上となりました。

**平岡：**J Aポイントカードの普及とあわせて、組合員の拡大に取り組みました。

J Aポイントカードは、直売所の利用などでポイントが付与されますが、その他に金融事業のキャンペーンを行ったことで、事業利用者の組合員加入の拡大につながりました。

また、直売所の出荷者に対しても出荷高に応じてポイントを付与するようにしていますので、出荷者のみなさんの励みにもなっています。准組合員のなかには正組合員資格をお持ちの方もいらっしゃいますので、そういった方には正組合員への変更の働きかけを行いました。正組合員が減っている現状を打開したいという思いからです。

**石田：**出資の問題もありますね。

**平岡：**1口1,000円で、口数は問いませんでした。

**石田：**わたしは、それでいいと思います。事務的には少々手間がかかりますが、組合員が増えるほうが重要です。今年度はどうでしょうか。

**平岡：**今年度も継続して組合員加入に取り組んでいます。

**石田：**『自己改革業績評価目標』の「地域・J Aを『つなぐ』活動の実施による『地域活性化』への取り組み」では、「食農教育」「地域農業の魅力を伝える活動」「地域と連携したイベント」のいずれも、実施回数の実績が目標の2倍ないしは2.5倍になっています。

**平岡：**コロナ明けということで、屋外の活動が少しずつ増えてきたこと



農産物直売所「ぶちええ菜」が地域住民との接点となる。准組合員や正組合員の加入拡大の拠点でもある

によるものです。もともとやっていたことですから、ようやく再開できたなどというのが率直な印象です。

各統括本部は、それぞれ「元気な地域づくり活動行動計画」を定めていますので、それを着実に実施するように管理職全員に案内を出しているところです。

**石田**：素晴らしい。自分たちのつくった活動計画であれば、それに従うのは当然ですからね。

ただ「支所運営委員会、利用者懇談会」については、実施回数、参加者ともに目標を下回っています。これはどうしてでしょうか。

**平岡**：令和5年度上期については、コロナの規制は緩和されたものの、屋内での協議が多いために開催できなかったことがあげられます。しかし、5年度の下期と6年度の上期、下期については必ず実施するように指示しています。実際にそのように動いています。

**石田**：支所協同活動については、ともすれば職員中心の活動になってしまうことが多いのですが、こちらはどうでしょうか。

**平岡**：わたしどもでは昔からそうでしたが、JAまつりなどのイベントは地域の



統括本部で農業まつりが好評。写真は山口統括本部の餅まき(左)と下関統括本部の農産物の販売の様子

の方々に動いていただくことを基本としています。支所運営委員会の方々にはその周知をお願いしていますし、支所だよりなどでも周知に努めています。

## ■ 教育文化活動基本方針「元気な地域づくり活動」の策定

**石田**：青壮年部の新規盟友、女性部の新規部員についても、目標を大幅に上回る実績を残しています。

**平岡**：そのとおりで、とてもうれしく思います。

ただ、新規のメンバーは増えていますが、メンバーの総数が減っている状況に変わりはありません。そのあたりは他県と同じです。その減るスピードを少しでもやわらげるといった効果はあります。

**石田**：JA山口県では、教育文化活動基本方針を合併初年度の令和3年3月に策定しています。その経緯を教えてくださいませんか。

**平岡：** 県域合併によって「JAが遠くなった」「合併のメリットのみえない」などの声が高まるのが危惧されました。

そのため、合併初年度から各統括本部に「教育文化・家の光プランナー」を配置し、そのメンバー11名と本所の組合員組織課を事務局とする「組織広報プロジェクト」を立ち上げて、基本方針の検討を進めました。

その結果、JAの強みは「食と農」と「人と人のつながり」にあることを確認し、あわせて「つなぐ」をキーワードとする教育文化活動基本方針「元気な地域づくり活動」を策定しました。令和3年3月に組織合意を得てオールJAで取り組んでいます。

ここで注目されるのは「教育文化活動」と「くらしの活動」の目的を整理していることです。簡単にいうと、教育文化活動は、そのものずばり組合員の「学びの場、活動の場」をどうつくるかがポイントで、くらしの活動は、組合員・地域住民の「くらしのよりどころ」として、支所や直売所をどう機能させるかがポイントであるとしています。

**石田：** そのとおりです。何もいうことはありません。

**平岡：** 「元気な地域づくり活動」を具体化するには、支所行動計画を策定・実施するだけでなく、「信頼される職員」をどうつくるかがカギとなります。

教育資材である「家の光三誌」「日本農業新聞」を購入しても、読まないという職員が少なからずいました。これではいけない、もっと学ぶ姿勢を持たないといけない。これらの教育資材を活用して「読み解く力」や「考えをまとめる力」「自分の言葉で伝える力」を養っていかねばいけない。そう考えたわけです。

そのため、全部署で月に1回以上、朝礼や会議のなかで家の光三誌や日本農業新聞の「気になる記事」を発表しあい、情報共有を図ることにしています。所属長は年間計画を作成し、実施内容を本所に報告しています。

その成果が徐々に出了のでしょう。自分の考えや思いを伝えられるようになりまし、事前に予習な



青壮年部ではスポーツ大会を実施。親睦を深めている



元気な職場づくり運動として、部署単位での読書会（『家の光』『日本農業新聞』）を実施している

どに取り組む職員も出てきました。「教育文化活動は土づくりである」という理解も広がりました。

**石田：**一昨日(8月21日)開かれた山口統括本部の「家の光大会」も大成功だったようですね。

**平岡：**女性部員の記事活用体験発表や『ちゃぐりん』愛読者(小学生)の発表、手芸作品の展示、ガーデニストのマーク・チャップマンさん(英国人)の講演などあって、「とてもよかった」という評価をいただきました。

## ■「元気な地域づくり活動」の展開

**平岡：**山口統括本部はわたしの出身地区ですが、そこでは目的別グループ活動が活発に行われています。

管内は5ブロック、20支部で構成されていますが、ブロック単位で料理リーダー、手芸リーダー、健康リーダー、野菜づくりリーダーを選んでもらい、リーダー研修会を開いて、そこで学んだことを各ブロックのグループ活動(『家の光』記事活用グループ)に活用してもらっています。全部で100くらいの記事活用グループが誕生しています。

**石田：**山口統括本部(旧J A山口中央)は昔から教育文化活動に熱心でした。合併後も変わっていませんね。

話は変わりますが、広報誌『J Aやまぐちけん』の2024年3月号に「J A山口県女性部とコープやまぐちが初の料理教室を開催」と出ていました。

**平岡：**協同組合間連携の一環として、1月に山口統括本部のキッチンで開催したものです。J Aから地元農産物、コープからコープ商品を持ち寄り、山口県家の光講師の藤井郁英先生をお招きして、ご当地料理「チキンチキンごぼう」など5品をつくりました。メディアも呼んで大々的に開催しました。

**石田：**素晴らしい、今後も続けてもらいたいですね。山口だけではなく、周南や下関などの統括本部でもやってもらいたい。協同組合間連携で職員同士の交流はよくありますが、組合員同士の交流はあまりありません。



山口統括本部は、図書コーナーが充実している



女性部では料理教室が人気

**平岡：**J A山口県の組合員はおよそ20万人、コープやまぐちの組合員もおよそ20万人。つりあいがとれていますし、ともに地域の協同組合ですから交流しやすいというメリットがあります。

**石田：**広報誌『J Aやまぐちけん』の2024年4月号に「お結びフォトコンテスト2024」の結果発表が掲載されていました。こんな「お結び」があるのかと思うような傑作ぞろいでした。

**平岡：**阪神淡路大震災のあった1月17日は「おむすびの日」です。それに合わせた企画として令和4年から始めました。今年で3年目です。

「お結び レシピ&フォト部門」と「お結び 映えフォト部門」の2部門を設けて、外部の先生に審査をお願いしています。今年は県内各地から89点の応募があり、宇部市の藤岡未歩さんの「大好きな瓦そばをおむすびにしちゃいました!」と、山口市の守田喜久子さんの「大きなお結び」がグランプリに輝きました。

(取材／2024年8月23日)



「お結び レシピ&フォト部門」の  
グランプリ作品



「お結び 映えフォト部門」の  
グランプリ作品

## J A山口県厚生連「小郡第一整形駅前クリニック」

J A山口県の平岡武経営管理委員会会長は、共通会長として、J A山口中央会会長、J A山口信連・J A山口厚生連の経営管理委員会会長、J A全共連山口県本部運営委員会会長も務めている。

J A山口厚生連は、地域の中核病院として、周東総合病院、長門総合病院、小郡第一総合病院を経営しているが、そのうちの小郡第一総合病院のサテライトクリニックとして「小郡第一整形駅前クリニック」を開院した。

駅前クリニックと名づけられているように、J R新山口駅(旧小郡駅)に隣接する山口市産業交流拠点施設「K D D I 維新ホール」のメディアフィットラボ棟3階に位置している。2,000人収容の大ホールを擁する交通至便の拠点施設である。

厚生連病院としては異例とも思えるような駅前クリニックであるが、スポーツクラブ、薬局も揃えた「健康サポート施設」の1つとして山口市の要請に応えたものである。

この要請の背景には「小郡第一総合病院は大病院なので、行ってもすぐに診察してもらえない」とか、「整形外科には全国的に有名な先生がいるが、なかなか診察してもらえない」などの理由があったとされる。

こういう形で厚生連病院が地域社会に役立っているのは誇らしく、すばらしいことだと思った。



新山口駅に隣接した立地。月曜から金曜日まで診療を行っている